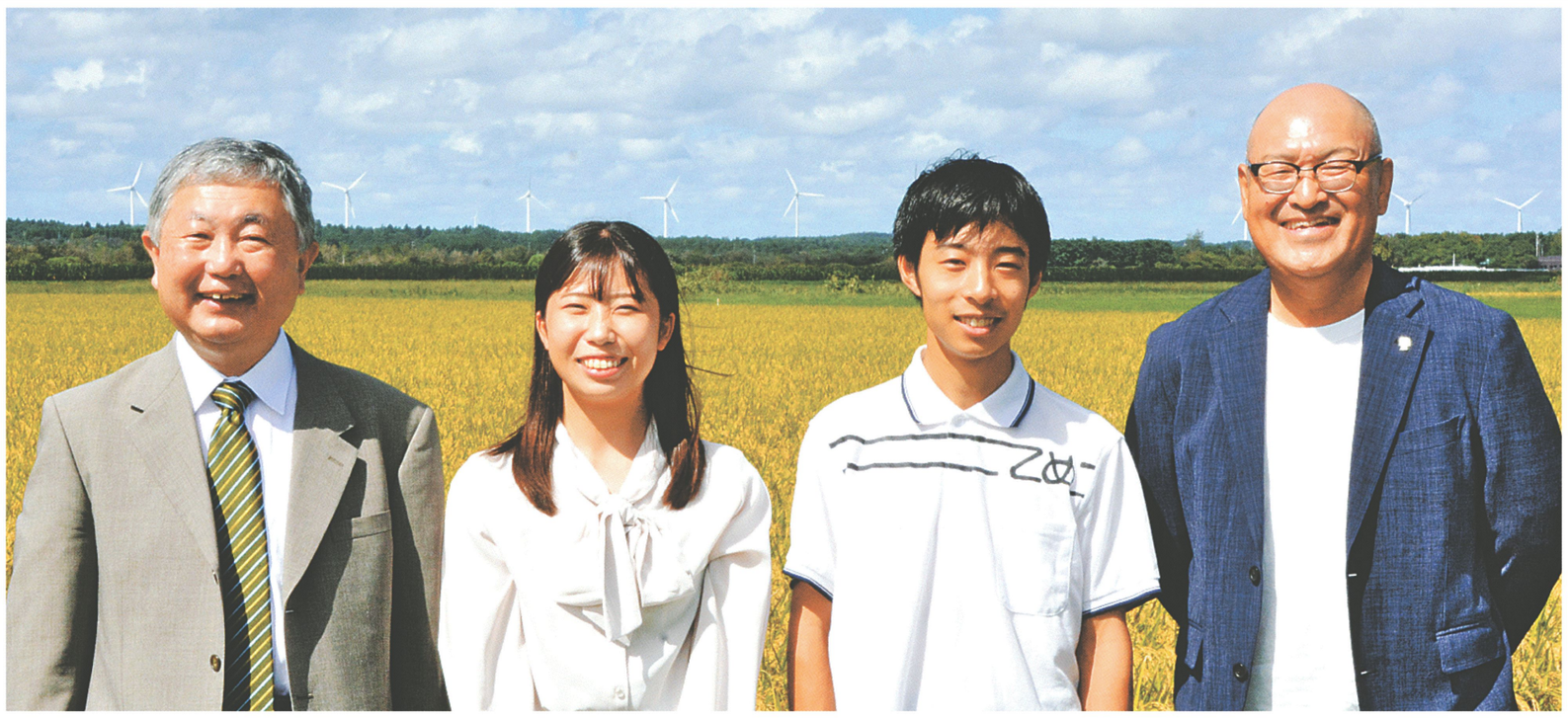
秋田の農学教育けん引

大潟キャンパスの歩み

1973年 4月	▶現在の大潟キャンパス敷地内に秋田県立農業短期大学が開学
1999年 4月	▶秋田県立大学開学。県立農業短大を県立大短期大学部に改組
2007年 4月	▶県立大短期大学部を閉学（3月）し、県立大生物資源科学部アグリビジネス学科（大潟キャンパス）に再編
2021年 4月	▶アグリイノベーション教育研究センター（AIC）を大潟キャンパス敷地内に開設
2021年12月	▶AICと連携してスマート農業の推進を目指す「秋田版スマート農業モデル創出事業コンソーシアム」が発足
2022年 5月	▶社会人向け講座「スマート農業指導士育成プログラム」がスタート
2023年 2月	▶AICの研究・管理棟が完成



県立大大潟キャンパス50周年記念座談会

県立農業短期大学（農短）が大潟村の大潟キャンパスに産声を上げて50年が過ぎた。以来、県立大短期大学部、現在の県立大生物資源科学部アグリビジネス学科へ改組・再編し、本県農業の発展をけん引。半世紀にわたり「耕学一如（こうがくいちにょ）」の精神を今につなぐ。県立大の福田裕穂学長(70)、農短出身（1981年卒）で前仙北市長の門脇光浩さん(63)、県立大アグリビジネス学科を昨年卒業した中島二千花さん(23)、同学科3年に在学中の竹内大さん(22)の4人による記念座談会の模様を紹介する。

恩師の教え背中押す　門脇氏

生きる学び

かどわき・みつひろ　1960年7月仙北市生まれ。81年県立農業短大卒。2009～21年仙北市長。一般社団法人「市民活動あきた」代表理事。

門脇　大潟村が「新生の大地」と言われた黎明期に県立農業短大で過ごした。学生時代に考えた「あしたの農業をどう描くか」ということについて、まさに答えを出す作業をさせてもらったのが仙北市長時代。「何でもやりなさい」という短大の恩師の口癖が背中を押してくれた。

中島　大学ではスマート機器を使った牛の発情関係の研究に没頭したが、今は県畜産試験場で比内地鶏の研究をしている。大学時代、学内で鶏を飼っていた研究室の先生に教えられて、道の駅で買った有精卵をふ化させたり、鶏を解体したりした経験が今の役に立っている。

竹内　大阪市出身で、雪国で農業がしてみたいという憧れがあって県立大に入学した。でも、学ぶうちに、農家をサポートしたり農産物を活用したりする方に興味が移り、「政策・経営マネジメント」のゼミに所属している。農家に直接取材をして経営状況や課題を聞き、リアルな農業を見詰めている。

学生のやる気を応援　中島氏

自由を継ぐ

なかしま・にちか　2000年1月大館市生まれ。22年3月県立大アグリビジネス学科卒。県畜産試験場比内地鶏研究部技師。

中島　少人数制の学びも県立大の特徴だと思う。先生と学生の距離が近く、何でもすぐに相談できる。学生が「やりたい」と声を上げたら、先生が機会を与えてくれる。これから県立大で農業を学びたいという人は、意欲を出して積極的に学びに向かっていってほしい。

竹内　行動したいという気持ちをあらわにすると、大学が手厚くサポートしてくれる。学生にとってはとても研究のモチベーションが上がる環境だと思う。だから、自分から動くことが大事。

福田　うちの大学は良い意味で「ゆるさ」があって、先生たちも自身の専門にとらわれず研究をしている。学生にも「これしかやっちゃいけないよ」とは言わないので、その自由さが結果的に学生の自主的な学びに役立っているのではないか。

新商品開発に手応え　竹内氏

地域に貢献

門脇　秋田で活躍している県立大の卒業生たちは、完全に地域の屋台骨になっている印象を受ける。農業関係だけでなくさまざまな職種で、彼らのように現場で汗をかく人材がいることはとても喜ばしい。「耕学一如」の精神が受け継がれていると感じる。

竹内　僕は大学の仲間と一緒に、県産米粉で作ったラムネ菓子「こめらむね」を商品化した。なぜ作るのか、材料に何を使うのか、ストーリーを組み立てるところから始まり、中身のある商品にできた。県立大で、秋田で農業を学んだからこそ完成した商品。卒業後も、秋田、東北で生活したいと思っている。

地元農家と共に学ぶ　福田氏

舞台は現場

たけうち・だい　2001年8月大阪市生まれ。県立大アグリビジネス学科3年。県立大生3人でつくる「こめらむね製作委」代表。

中島　大学では数多くの学びを得たが、大潟村の農家を手伝うアルバイト「農業バイト」（通称・農バイ）も、とても貴重な経験だった。田植えや稲刈りなどさまざまな農作業をした。その年の作柄状況などについて、農家さんの生の声を聞くと勉強になった。

福田　農業系の大学や学部学科はたくさんあるが、一般的に学びの場は研究室や圃場で、なかなか農家まで広がらない。一方で、本学では学生が農家と一緒になって学んでいる。非常に現場に近いのがいいところ。

門脇　自分が若いころに思い描いていた未来とは違った現実に直面している。不安定な国際情勢や気候変動、人口減少など、危機的な問題が山積している。そんな中でも農業には大きな力と可能性があるはずだ。現場主義で実践的に課題解決をしていく、挑戦的な大学であり続けてほしい。

村づくり、大学が貢献

福田裕穂学長に聞く

担い手不足や市場競争の激化など、農業が抱える課題は多い。福田裕穂学長に、思い描く農学教育の方向性などについて聞いた。

◆

―この50年で農業はどのように変わったか。

「単に農作物を作る技術を知っていればいいという時代ではなくなった。現代の『食』のスタイルから考えた時に何を作ればいいか、流通や加工はどうしたらいいかなど、トータルで考えなければいけないのが今の農業。そうした時代の流れの中で、県立農業短大は4年制に改組し、一層学びを深めてきた」

―これからの農学教育に必要な視点は。

「農村の設計、村づくりから、農業をどうするか考えることが大切。アグリビジネス面では県立大、カルチャー面では秋田公立美大、外国人とのつながりは国際教養大、地域医療などの面では秋田大が村づくりに貢献できるはずだ。4大学が連携し、将来の秋田の村の在り方を議論しているところだ」

―持続可能な農業の実現に向けた大学の役目とは。

「気候変動への対応など、将来を予測した上で農業を最適化していく必要がある。稲作の場合は何をどう変えるのか、あるいは土地に適した他の作物の生産に活路があるかもしれない。農業の従事者や関係者、場合によっては工業など他業種の関係者と一緒になって新しい農業と秋田をつくり、世界に発信することが大学の役目になる」

ふくだ・ひろお　1953年10月静岡県生まれ。東大大学院理学系研究科植物学専門課程博士課程修了。理学博士。東北大教授、東大副学長などを歴任し、23年4月から秋田県立大理事長兼学長。

〈企画・制作〉秋田魁新報社営業局

耕学一如

書に込める本学の想い

農業（耕）と農学（学）が共に歩み進展する姿（一如）を示す「耕学一如」の言葉は、秋田県立農業短期大学開学以来の理念として、学び舎を引き継いだ秋田県立大学・大潟キャンパスの石碑に今も刻まれています。短大が開学してからの50年間、地域の農業を取り巻く状況は大きく変化しました。高齢化が進む本県ではとりわけ地域の農業と農村をどう守り、豊かなものにしていくかが喫緊の課題です。本学ではこうした課題を解決すべく、AIなど最先端の技術を活用して農業の効率化を目指す「スマート農業」の研究に取り組む「アグリイノベーション教育研究センター」を2021年に大潟キャンパスに開設し、地域の皆さまと一緒になって研究や開発を進めています。これまでも、これからも、秋田の発展のために。「耕学一如」を心に刻み、秋田県立大学は挑戦を続けます。

Akita Prefectural University
秋田県立大学
［大潟キャンパス］〒010-0444　南秋田郡大潟村字南2-2
TEL 0185-45-2026　FAX 0185-45-2377
HP▶https://www.akita-pu.ac.jp/